旭川の水辺空間は、いま

てらしま・かずお
1944年北海道生まれ。
北海道旭川工業高等学校教諭・旭川大学非常勤講師。
大雪と石狩の自然を守る会代表、旭川都市計画マスタープラン策定懇談会委員、本協会理事。
主な著書に『大雪・日高と北海道の名山』『神々の遊ぶ庭』『大雪山のナキウサギ裁判』『大規模林道はいらない』（いずれも共著）など。

寺島一男

要旨

川は私たちの身近な自然であるとともに、地域の生活・文化・歴史を形づくる大切な基盤になっている。それはまた山と海を結ぶ自然の回廊であり、グローバルには地球の水循環と物質循環の要になっている。旭川は多くの川と橋を抱える〝川のまち〟である。その名にふさわしい河川環境は果たしてあるのだろうか。河川敷の利用を通して旭川の水辺空間を考える。

◆岸辺は人と川の結び役

「川」の字源は、水が両岸の間を流れる様からきている。先日川べりを歩きながら、子どもたちにこのことを聞いたら、岸の代わりに堤防と答えるのではないかとふと思った。

日本は誰もが認める山国だが、それはとりもなおさず川の国を指す。日本全国どこへ行っても、川のないところはない。だがその川の私たちが目にする多くは、岸辺がないことはあっても堤防のない川はめったにない。

川がコンクリートで固められ、川に近づくと危険と教育されているいまの子どもたちには、恐らく岸辺の実感がないのではと思う。

岸辺は川の単なる水際ではない。水際につながる水域と陸域を含めた水辺空間だ。水域に生えるアシなどの植物や、陸域に生える河畔林などを含めて様々な生物が生息する空間が岸辺である。

岸辺があった頃、人々は川に親しんだ。虫を捕ったり、魚を釣ったり・すくったり、泳いだり、たき火をしたり、ズボンの裾をめくって涼んだり、灯籠を流したり、実に様々な形で親しんだ。その意味で、岸辺は人と川の結び役だった。

高度成長時代に一挙に進んだ、河川工学一点張りの性急な河川改修は、川から岸辺を奪い親しむ人を追い出した。おもしろいことに川から岸辺がなくなるのと軌を一にして、私たちの身近な自然からミズバショウやザゼンソウの生える〝ヤチ〟が消え、唱歌に歌われた〝春の小川〟も姿を消した。

◆無視し過ぎた〝川の意志〟

言うまでもないが、堤防や河川改修を否定するつもりは毛頭ない。すべての水辺が〝自然〟でなければならないと言うつもりもない。水害から命や財産を守ることは、誰が考えても重要なことであり、河川に人間が手を加えなければならない以上、そこがすべて〝自然〟であることなどありえない。

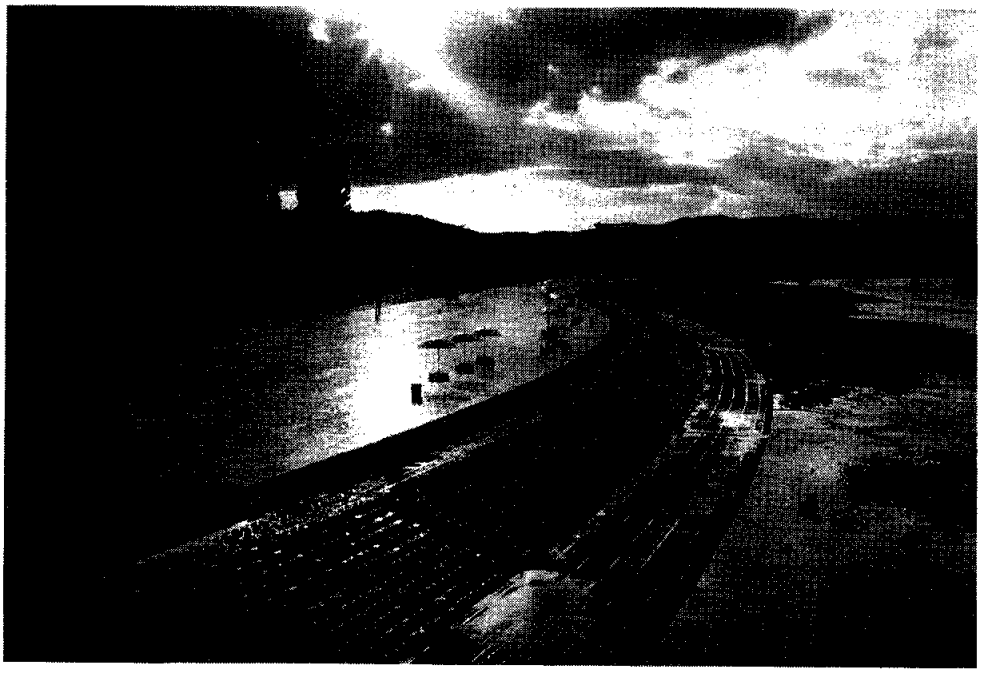
問題は川をどうとらえ、どう付き合っていくかの基本にある。これまで川は治水や利水を偏重した結果、あまりにも自然環境が軽視されすぎた。川は何よりも自然の産物であり、地球における水循環と物質循環の重要な担い手である。あまりにも人間の意志を優先させて、〝川の意志〟を無視し過ぎた。川と人との係わりが、人間の精神を育み、地域の文化を育んできたことを忘れ過ぎた。

さすがにそのような事態が長く続くと、様々なところで歪みや綻びが目立つようになった。改正河川法が、河川の環境重視と住民参加を打ち出さざるを得なかったことは、むしろ当然だったともいえる。これから重要なことは、河川管理者も市民もどんな議論をしながら、どんな川づくりを目

指して、現実にどう川と付き合っていくかである。その実践がいま求められているのである。

◆中途半端な河川敷利用

さる一〇月一七日、旭川の水辺空間がどうなっているかを知ろうと、一つの行事が行われた。大雪と石狩の自然を守る会主催の、河川敷見学会・討論会である。



改修された河川敷、自然豊かな川づくりに程遠い（石狩川　旭橋付近）

市民、各種団体、研究者、行政（市、道、開発局）が一堂に集まっての、現地見学と討論である。この秋には珍しい、あいにくの雪が降る寒い日曜日だったが、予想を超える五〇名以上の人々が参加した。午前中、石狩川・忠別川・牛朱別川・美瑛川の各班に別れて現地視察、午後には市内の会場で、ホットな意見を交わし合った。

旭川はまちの中心部を多くの川が流れる、文字通り川のまちである。その本数一二九本（行政管理上一六一本）、総延長六〇七・四キロメートル、架かる橋の数は七四六橋にも及ぶ（一九九二・四）。

都市部の川の例にもれず、改修を重ねた川はコンクリートで固められ、中心部では堤防ぎりぎりまで人家が密集している。河川敷は、堤防と水際のわずかな河川管理上の空間を残して、高水敷のほとんどが河川公園として利用されている。旭川は日本でその数が最も多いと言われる野球・テニスなどのグラウンドを始め、パークゴルフ場、花壇・東屋・遊具の配置されたミニ公園など、それは多種多様というより雑多である。

ところどころにホッとするような河畔林も残っているが、全体的には貧弱である。旭川市の周辺部には、後背地とつながった緑豊かな嵐山、旭山、突哨山、雨紛台地などの丘陵地が取り囲んでおり、そこと川がネットワークしているだけに、河畔林の断片化は非常に惜しまれる。その河畔林も近年の河川改修、非常災害時の道路建設、橋の架け替え、冬期の排雪場などによって、減少の傾向にある。

旭川における河川敷の利用には、もっと統一した理念が必要である。周りの植生を断ち切ってイチョウやサクラの植樹が突如あらわれたり、意味のない歩道や芝生が広がっていたり、遊具や東屋が無理やり空間を埋めていたりする。

◆河川敷は生きている川のために

都市部の河川だけに、市民の河川敷利用の要望も多様化していることは、想像にかたくない。だがあれもこれもでは単なる要求の陳列場になりかねない。まずは様々な要求を持った人同士の話し合いが基本になるが、その際それはどうしても河川敷につくらなければならないものかどうか、十分検討する必要がある。

都市部の川とそうでない地域の川では、当然その形態や利用に違いがあって当たり前である。だが、それにしても河川敷は「生きている川」のために利用することを、まず第一に考えたい。そして、日常生活の中で子どもも大人も、普段着でつきあえる環境をつくることとそのことは矛盾しないと思われる。

旭川の河川敷を見渡してみると、私たちの係わ

り次第ですぐれた水辺空間を創れるところが、まだたくさんある。河畔林を周辺緑地と上手につなぐことができれば、野生生物の「緑の廊下」にすることも可能だ。

河川改修よって、止む得ず伐らざるを得ない河畔林もあろう。しかし伐る一方ではなく、河畔林を再生できる空間もずいぶんありそうである。

一五年前から始まった石狩川のサケの稚魚放流も、溯上最大の物理的障壁だった深川の花園頭首工に、来春にも魚道が完成する見込みで、そうなると三十数年振りに旭川でサケの姿をみることができるかも知れない。そのときのための川づくりも大切である。

こうしてみると川をどうするのか、川とどう付き合っていくのかは、私たちのまちづくりをどうするのかを問うていることにほかならない。

◆本物の川の顔を求めて

河川敷討論会では、河川敷の公園利用の問題、河畔林と治水の問題、多様な生態系をいかにつくるか、川との付き合い方、川に対する子どもの現実と今後、など興味尽きない問題がたくさん提供された。

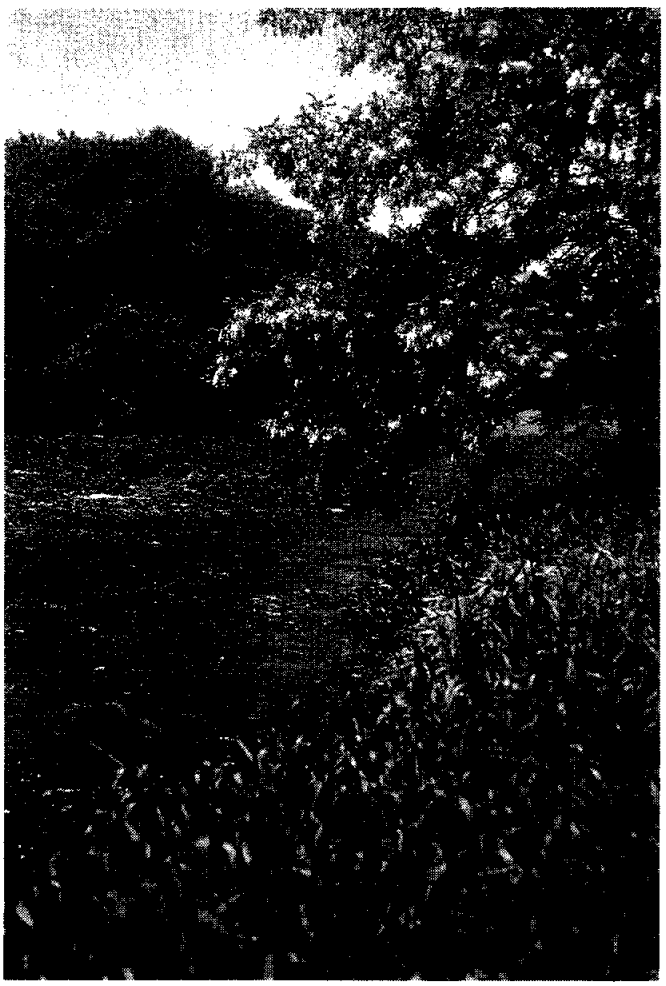
討論の中で印象に残った発言もままあった。小さな子どもたちが川を見て、水族館でないのだから川に魚がいないのは当たり前だねと言っていたということ。あまりにも人間は川をつくり過ぎ、川に川を、自然に自然をつくらせる「待ち」の姿勢がたりないということ、などである。

今回の行事の特徴は、河川敷の利用に関して様々な意見を持つ市民や団体、関係行政が参加して、初めて一つの土俵の上で忌憚のない話し合いができたことである。

河川敷に野球場やパークゴルフ場をつくる運動してきた団体。河川敷の帰化植物を調査しているグループ。釣りや探鳥の愛好家。自然保護団体。河川改修や河川管理をする技術者や行政マン等々である。

この種の話し合いは、得てしてパターン的かセレモニー的な話し合いになりやすい。問題を追求する市民に対して行政側が国会の縮図のような答弁を繰り返したり、持論に固執する市民同士がいたずらに非難し合ったりで、なかなか発展的な議論になりにくい。たまに和やかに話し合いが進んだと思ったら、それはまあまあ主義のさっぱり内容のない議論だったりする。

今回、笑いが入りながらも本音が飛び交い、緊張はしても硬直しない議論がままあった。一つの結論を出すような討論はしなかったが、それぞれ共通項を持ちながら、自分なりの問題として川を考えることができたのではないだろうか。今後、地域、地域でこのような議論が進めば、川は近い将来本当の顔を私たちに見せてくれるのではないだろうか。



街の中を流れる川とは思えないよいところもある。
（牛朱別川　功橋付近）